

海を渡る夢の絵本



絵はあくまで道具
どう使うかが大事

13歳の時、父の仕事でニューヨークに転居しました。入学したプレップスクールには、ユダヤ系の裕福な子どもたちが集い、日本人の私はぽつんと浮いていました。寂しさを紛らわすためにひたすら美術室で絵を描く日々。ある日の昼休み、珍しく米国人の男の子が話し掛けてきました。「日本からやって来たんだよね。どうして歌舞伎はみんな男なの?」。私が「I don't know」と答えると、「君は日本人なのに、自分の文化のことを知らないんだね」と、あきれてどこかへ行ってしまいました。友達になれたかもしれないのに、何も答えられない自分が恥ずかしくなりま

した。と同時に気がついたのです。自分らしく日本人らしくいられないんだ、西洋人のまねはやめよう。そうしたら、急に友達もできて、いつの間にかクラスの人気者になっていました。

画家を志してパーソンズスクールデザインに進学。学生ながらアートの仕事に恵まれ、華やかな日々を送りました。でも、いくら成功しても何のために絵を描くのかの中心に疑問が残るのです。

1993年のある日、東京からニューヨークに戻る際、ケネディ空港に到着し、体調を崩してしまいました。高熱で両替の長蛇の列に並ぶ気力も失って、途方に暮れていたら、金髪の小柄の女性が目の前に立っていてドル札を差し



藤田 理麻

ある朝、夢の中で「チベットの人々のために役に立つこ

消えつつある民話を
難民の子どもたちへ

出すではありませんか。自宅までの交通費相当分です。恐縮して断ると彼女は「あなたに必要なものです」と告げ、私にお金を渡すと立ち去っていききました。お札を言おうと追い掛けても姿はなく、胸に落ちぬまま家路へ。

数年月後、偶然手にした本で同じような不思議な体験をした人が多くいることを知り驚きました。「どんな小さなことでもいい、社会や他人に役立つことをしよう」と決意した瞬間でした。

それまで人生の「ゴール」だった絵が、それからは「ツール」になりました。「絵はあくまで道具、それをどう使うかが大事」と気付いたのです。

とをしない。今すぐ」という言葉を聞きました。未知のテーマでした。図書館で歴史や文化を調べ、ソーホーのチベットの店主からは、ヒマラヤの雪の中を着のみ着のままで亡命した過酷な体験を聞きました。そんな彼らのために何ができるのか? そうだ絵を描くことだ。絵本をつくろう。

ニューヨークのようなメルティング・ポットでフライドを待つて生きるには、自分が何者であるかを見失わないことが重要です。でも、故郷や家族から遠く離れて生活する亡命者は、祖国の民話を伝えることさえままならないので

す。消えつつある民話をチベット語の絵本にして、難民の子どもたちに贈ろうと決めました。

1年かけて民話を探し、コロンビア大学の近くに住む60歳ぐらゐの僧侶から口伝で教えてもらいました。女優のウマ・サーマン氏とご家族や俳優のリチャード・ギア氏もフライングになってくださり、どんな支援の輪が広がっていききました。そして出来たのが『ワンダートーク』という民話の絵本です。二人の兄弟の物語で、茶目っ気があって、静かに深い教えがある古い民話です。仏教徒のチベット人は面と向かってストレートなことは言わない民族なので、そこはちょっと日本人に似ているかもしれません。序文は、ダライ・ラマ法王が書いてくださいました。

東京の百貨店のギャラリイでは、チャリティーオークションが決まりました。音楽家の坂本龍一氏、サッカーの中田英寿氏、写真家の桐島ローランド氏など多くの方が参加して、びっくりするよつな寄付金が集まり、インドとネパールのチベット人難民学校に2300部の絵本を届けることができました。この本は、光栄にも国連の児童選定図書に選定され、世界中で読まれています。

マセチューセッツ州ケンブリッジの女性科学者から、核で苦しむ子どもたちに手洗いを励行する絵本の依頼もありました。インドでは、今もなお結核で幼い命が失われているそうです。予防医学の説明書のような企画書を子ども向けのストーリーに書き直し、楽しく学べる絵本ができました。こちらはノーベル賞科学者のワトソン博士の推薦文入りです。

聖夜は離れている人々を思いやる

絵本のプロジェクトは今も続いています。最近「あなたに絵本を幼いころから繰り返し読んで育ちました」という子どもにも出会えてうれしく思いました。

この冬は、クリスマスを前に、静かな祈りの絵をSFT (Students For A Free Tibet) のチャリティーオークションに出品しました。聖夜は遠く離れている人々への「思いやりの日」。アフガン、パレスチナ、ソマリア、難民の子どもたちは世界中にいます。苦しんでいる子どもたちや人々が少しでも明るい気持ちになれるように。明日を平和に迎えられるように。心からお祈りして、みんながサポートできることをこれからも考え続けたいと思います。

(ふじた・りまII画家)